

趣味としての西洋畫

黒田清輝

元來畫そのものが趣味の主なるものである、人の趣味の對象となるものである。そこで茲に「趣味としての西洋畫」と云ふ題の下に話すのは東洋畫に對して西洋畫の特殊の趣味を、ざつと説明して見るまでの事である。

さていよくとなつて見れば西洋畫の趣味を説明するなど、云ふ事は全く困難である、或は之を口にする事は不可能と云つてもよい。鑑識家には出来るであらうが、吾々如き實技家には人に聽かせて成程と思はせるやうな理窟を述べる事がむづかしい。實技家が自然に對して、畫に現はすべき趣味を味ふ場合も、畫では現はし得るが、口には出す事が出来ない。少くとも吾々には至難の事である。故に茲にも學者のやうに、條を立て、立派に説明するのではない。

幼稚と云つては失敬であるが、西洋畫を見なれぬ人に出来る上分り易く説明して見やう。西洋畫が東洋畫に對して、一見まるで異ふのは何であるかと云ふのに第一に材料である。斷つて置くが洋畫と云つても時代により流派により種々變つたものがあるので、専門家としては、一概に云ふ事は出来ないが、兎に角、洋畫は材料が異ふので東洋畫に比べては大に變つた趣を現はす。猶少しく立入つて觀察の方から云ふと、光を描く事、遠近の差を現はす事、物體の觀察が緻密である事などは洋畫の特趣な點で、従つてそれ等の點から特別な趣味を生ずる事になるのである。

故に西洋畫は、ざつと云ふと東洋畫よりも其の趣味が廣く且つ見場が立派で目立つ様である、併し繪畫と云ふ立場から眞に深く觀察すれば、東洋畫と西洋畫の眞に深い所は、矢張一致する様に思はれる。之れを趣味といふ點から見ても、何れが深いか、優劣は決してつけられるものではない。

近頃洋畫を作る上に、主觀客觀など、いふ難しい事を云ひ、客觀主義の方から云ふと主觀主義は駄目だと云ひ、主觀主義の方からは又客觀が駄目だと云つて、洋畫中にも矛盾してゐる觀察がある。併しそんな難しい事を云はずに、繪とはどんなものかと云へば、物の形や色を平面に描き現はし、人の心を喜ばせるものである。その心を喜ばせる上に於て、物の實在を寫實的に現はして喜ばせる事もあれば、色の配合の美でさうする事もあり、又所謂主觀的に感じを作家と觀者との間に通はす點でさうする事もあるのである。而して以上三つが東洋畫に缺けてゐるかと思ふに、然うではない。東洋畫も亦その三者を備へてゐる。であるから特に洋畫としての趣味は理論の上からは擧げ難い、即ちその擧げ難い所が、趣味の趣味たる所以で、理論で擧げ難くても、見る所の感覺が異ふので、その感覺の異ふ所は、材料と光りや遠近を現はすことに重きを置いたためとであらう。

材料や描き方の上から説明すれば、全然東西の區別をする事が出来るが、畫の極致とも云ふべき趣味の上からは論ずる事難く、心の中で思つても口には出し難い。例へば漢詩と和歌との如く、何れも詩的であるが、同じ事でも出来上つたものは異つて居りしかも煎じつめれば一つに歸する。感覺から云へば和歌は優美で平易に、且つ懐しみがあるが、漢詩は勇壯で嚴格な所がある。併し其の何れをとつても詩的と云ふ所は共通であつて、唯感覺の上から差があるのみである。西洋畫と東洋畫とも、日本人の感覺の上には漢詩と和歌とのやうなもので、何れを好む

かと云へば十人十色で、自分の趣味から云つても、西洋畫を描いてはゐるが、東洋畫の趣味を持つてゐない譯ではない。東洋畫と西洋畫と其見る物に對して異なつた感覺を以つて迎へるのである。故に應用の方から云ふと、日本の瀟洒な建築に油繪では、いくら日本畫に近い主觀的の油繪でもう、つりが悪い、それが趣味の相違である。これに反して、西洋風の建築で、厚い壁の重くるしい裝飾の室では、いくら濃厚の色彩ある日本畫でも、猶輕すぎる、これも趣味の差である。又漢詩と和歌の例をひくが、書生が高聲で吟ずるには漢詩ならば勇壯でいゝが、優しい和歌では不適當であるといふのも、同じく趣味の相違である。何れの趣味が優ると云ふのではない、相違である。

日本畫丈の例を引くと、佛畫には立派なものがあるが、普通の人には佛臭く、氣味悪く、恐ろしい様な感じがする、一口に云へば愉快な感じが起らない。又狩野派や四條風の畫を見ると、一方には嚴格な感じが起り、一方では手際よく輕妙な畫といふ感じが起り、文人畫を見れば學者的に高尚な畫といふ氣がする。その、感じがする、氣がする、といふのが即ち趣味で、自ら皆趣味が異つてゐるのである。

趣味は習慣や教育によつて大部分出来るものであるが、西洋畫に對しての趣味は、前に述べた如く、用ひ所によつても明かにわかるものであるが、其の用ひ所が今迄の日本に無い爲めに、日本人は洋畫に對する趣味が解らなかつたのである。又解る必要も機會もなかつたのである。であるから洋畫の趣味の解ると云ふ事は、難しい事で、解らせる事も亦困難である。唯今後西洋の文明と密接の關係が出来、日本の文物が變遷する以上は、此の種の趣味も次第に増加し來り、從つて解り易くなる事と思ふ。

また話が前後するが、よく西洋のものを評してバタ臭いと云ふ。西洋畫もその一つで、矢張りバタ臭く、洋畫の

趣味はバタ臭い所にある。所でバタが日本人の口に適せないかと云ふに、一部の人は嘔吐を催すが、今日は都會では多くの人が洋服を着、西洋料理を食ふ、それらの人々にはバタも不思議でも何でもない。第一バタそのものが日本で出来、これをあらゆる料理に用ふる人がある位である。さて然らばバタを用ふる西洋料理は、味の上から鰹節や味噌を使ふ日本料理より上等だと云へるかと思ふに決して左様でなく、又悪いとも云へない。バタと鰹節とは味が異ふのである、いづれがいゝとも悪いとも云へない。東洋畫と西洋畫の趣味の差も之れと同様である。

趣味としての西洋畫、即ち洋畫を味はふには、つまり洋畫の見方を心得て觀るやうにすれば自然に趣味が出る、これは矢張食べ物のやうに、食べてみてゐるうちに、善悪がわかる。いきなり鮭やチーズをうまいと思ふ人はあるまいが、まづ食べなれてみれば、他のものに比べて特殊の美味が味はれる。これが即ち趣味である。故に第一に洋畫に就いては、見方を心得ねばならぬ、見方の内で理論的になつてくれれば愈々味が深くなり、始めて特殊の趣味も出てくるのであるけれども、これはごくごく深い遠い事として、茲に初學の爲めに見方の一端を述べてみれば、第一、光線より生ずる明暗の調子。第二、配色の調和。第三、構圖。それからもう少し細かに注意する點を云つてみれば、デッサン及び線、これは形の描き方で、主に畫中の物件の輪廓などの事で、構圖と大なる關係を持つ。モデル、これは人體などを描く場合に、肉付きを程よく纏める事で、殊に人物畫に缺く可からざる技巧の一つである。それら總べてのものに就いて、其の巧拙を考へてゆけば、だんだん味が出て、東洋畫でとても味はふ事の出来ぬ一種の趣味が生ずるのである。